

尾瀬入山10万人最低

昨年自粛・コロナ対応影響

群馬や福島など4県にまたがる尾瀬の2020年の入山者数が約10万7千人だった。1989年の調査開始以来最低。環境省関東地方環境事務所の調査でわかった。コロナ禍で入山自粛が続き、山小屋も感染防止策の準備で営業開始が遅れたことが響いた。

尾瀬では昨年、夏山シーズンを迎えても、尾瀬保護

財団や環境省から入山自粛が強く求められた。群馬県側は、ミズバシヨウの見頃が過ぎた5月下旬から、福島県側は7月から入山が可能になった。山小屋や休憩所の営業開始は7月1日以降と遅れ、営業そのものを見送った施設もあった。

主な入山口に設置した赤外線カウンターの、5、10月に入山した数を調べている。調査を始めた89年以降で96年の約65万人が最多だったが、レジャーの多様化などで減少傾向が続き、19年は約25万人と最低を更新。コロナ禍の昨年はその半数以下になった。

昨年の入山者数は10万6922人。月別では、入山自粛の中で群馬県の鳩待峠口と大清水口しか入れなかった5、6月がそれぞれ1270人、4454人と激減。ニッコウキスゲなどの湿原植物が見頃で年間の中

でも多くの人が訪れる7月も1万6748人にとどまった。8月の3万6401人が最も多く、9、10月はいずれも2万人を超えた。入山口別では鳩待峠口（尾瀬ヶ原方面）が全体の53%を占め、利用者の集中は変わらなかった。

尾瀬山小屋組合の清水秀

一組合長は「入山者数が少ないのは仕方がない。感染対策により尾瀬からコロナを出さなかったのでは」としている。環境省の担当者「入山者の数だけでなく、満足度の高さを目指してリピーターやファンを増やせば」と話した。

（張春穎）



コロナ禍により鳩待峠口に置かれた入山自粛を求める看板（左）
2020年6月